

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720059

研究課題名（和文）アジアにおける身体表現の変遷～温故知新が生み出す“異物”の交流～

研究課題名（英文）Transition of body expression in Asia

～Exchange between “foreign bodies” that taking a lesson from the past invents～

研究代表者

北村 明子 (KITAMURA AKIKO)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：40334875

研究成果の概要（和文）：文献・映像資料からの理論的リサーチ、現地でのフィールドワークからの実践的リサーチにより、インドネシアの伝統舞踊、現代舞踊、ブンチャックシラットを中心とするシラット拳法を立体的に把握し、それらの背景をふまえた上で、インドネシアアーティストとの実験的共同舞台制作を実施。それぞれの作品創作過程の方法論、作品解釈、振付過程の違いなどに直面しながら、異なる身体表現技法の共存の可能性を、多様な視点から実践的に探究。舞踊・身体表現の可能性について、新たな課題を得ることができた。

研究成果の概要（英文）： Through practical and theoretical research via film, literature and field study, I was able to understand and bridge Indonesian martial arts (Pencak Silat), Indonesian traditional dance with contemporary dance in a multi dimensional way. Based on these different backgrounds, I created an experimental dance with an Indonesian dancer and composer and a Japanese visual artist and composer.

It is amazing to see such a coexistence on stage because these two different cultures both have different ways of body expression, methodology and interpretation of dance choreography. From this experiment, a new genre was created using dance and body expression as the base of the next step toward the future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：舞台芸術学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：現代舞踊・舞台演出論・身体表現・振付論・コンテンポラリーダンス

1. 研究開始当初の背景

西洋の舞台舞踊芸術の現在は、400年の歴史を持つバレエ技法から、それに異を唱えて登場した20世紀初頭のアメリカのモダンダンス、さらに全てのテクニックを否定し60

年代に登場したポストモダンダンス、そして現代のコンテンポラリーダンスに至るまで、脈々と異なる芸術領域と横断しながら、その変遷を遂げている。日本国内では、80年代欧米から招聘された舞踊作品群に大きく影響

を受けながら、新たな舞踊シーンが構築されてきた。日本の現代舞台舞踊芸術は、迅速に外界の”異物“を吸収し、「自国の伝統芸術に対する反体制」としてではなく、むしろ外部の刺激をしたたかに取り入れ、発展・流布してきたジャンルである。日本を除く、他のアジア（アジアの地理的定義についての詳細はここでは割愛する）におけるコンテンポラリーダンスでは、その身体技術の基本を各国の伝統舞踊に置いている国が多い。芸術文化にとって地理的な環境や、舞台芸術を支えるさまざまな社会背景（劇場体制、客層、舞踊教育機関の発達、文化政策、経済政策、他国間との情報交換や提携など）の違いは大きく影響する。地理的に近距離にあるアジア諸国の新しい文化について、日本国内での情報は極めて限られている。現代社会におけるアジアの中の日本を考えていく上で、アジア諸国の現代芸術、特に新たな身体表現と歴史背景の関連性について、実践的なりサーチ研究を進めていく必要性が強く感じた。現代舞台芸術は文献研究のみでは網羅できない最先端表現である。振付家として、実践研究を通して「既成の身体語彙から逸脱するもの」に重点を置くだけではなく、異文化間における対話をテーマとし、伝統芸術と現代芸術の繋がりを既成の形式にとらわれず芸術表現へと昇華することができるような、アジアにおける現代舞踊のりサーチ・分析を探求する必要性に迫られていた。また、アジアの舞踊身体語彙を考える上で、理論・実践研究において武術・拳法等の関連性、情報などを調べ、心・技・体を広くテーマに置き、より新たな舞台芸術表現の方法論を模索する必要があった。

2. 研究の目的

アジアにおけるコンテンポラリーダンスの現在について、インドネシアに焦点を絞り、伝統舞踊と現代舞踊の関係性についての調査を進める。

(1) 文献により各国の舞踊芸術の歴史的背景の調査 (2) 代表的な現代の振付家らの振付方法論の現地りサーチ・分析

(3) 伝統舞踊における身体表現形式と欧米の身体表現技法との間にある相互影響作用の考察 (4) (3) の結果と日本国内の現在の舞踊芸術とを比較。

これらの考察手順を通し、伝統と新たな芸術の間にある対話、異文化との対話により、身体表現技法や作品におけるドラマツルギーがどのように影響を受けて変遷してきたかを考察する。

理論研究最終段階では、グローバルな視点に立ちながら、欧米とは異なる発展

を遂げてきたアジアにおける新たな身体表現の展開を読み解く土台作りとして、研究会、報告書作成、論文記述という過程を通して公的に研究内容を発表。一方で、舞台実践研究の提示を行うことを目的とした。

この研究において最も重要な点は、上記の理論研究結果をふまえ、振付家としてインドネシアの芸術家との共同作業により、「異文化の対話」をテーマとする作品創作を実践的に試みることにある。そして、アジア発、日本国内と相手国の2カ所にて、実験的舞踊舞台芸術の発表という実践形式を研究結果として提示することを目的とした。

3. 研究の方法

文献研究においては、筆者がこれまでに主に実践研究を重ねて来たインドネシアを中心とし、武術、伝統舞踊、身体表現に深くかわり文献をりサーチした。武術については、インドネシアのブンチャック・シラット、プリサイディリ派について、実践研究から入手できる技法書や、他英語文献、インドネシア語文献を参考にした。また、ミナンカバウ族の伝統的なシラットについて、主に英語国語文献と国内の先行文献にて調査を進めた。

国内における先行研究者、専門家らと、理論・実践研究を同時に行い、個別ディスカッションを行った後、セゾン文化財団森下スタジオ、世田谷パブリックシアターの協力を得て、研究会を主催した。研究会参加者には、ブンチャック・シラット プリサイディリ派の師範 スシロ(Soesilo)氏、日本ブンチャック・シラット協会会長 早田恭子氏、総合研究大学院大学 助教授 村尾静二氏、ほか。

海外現地りサーチにおいては、インドネシアの振付家 サルドノ・クスモ (Sardono Kusumo) 氏、マルチナス・ミロト (Martinus Miroto) 氏、ムギヨノ (Mugiyono) 氏、ハルタティ (Hartati) 氏、ジャカルタのサリハラ劇場キューレーターであるトニー・プラボヴォ(Tony Prabowo)氏、ケロラ (Kelola) 財団代表のアムナ・クスモ(Amna Kusumo) 氏、ほか、多くの若手振付家の協力を得てインタビューりサーチを進めた。また、現代ワヤンのパフォーマーである、スラムット・グンドノ(Slamet Gundono)氏とは実践共同研究についてのディスカッションを行った。インドネシア以外のアジアの現状についてはシンガポール エスプラナード劇場の元舞踊部門キューレーターであるキム・セン (Kim Seng) 氏ほか、ベルリン 世界文化の家、バルセロ ナメルカット劇場、ベルギーカイシアター、他、欧州からアジア舞台芸術への視点がどのように変遷しているかについて、多領域からの協力を得て、各担当者と

リサーチディスカッションを行うことができた。さらに、現地調査の際、新しい身体表現という現在進行型の領域のため、作品鑑賞・分析リサーチ、映像資料情報交換などを中心とし、さらにフェスティバル主催者の活動記録などを収集し、偏りのない資料収集に努めた。

これらのリサーチを経て、2011年12月～3月にかけて協力研究者である、映像作家石川慶氏、音楽家 森永泰弘氏がそれぞれインドネシアに渡り、フィールドワークを進めながら、実践研究内容に関わる素材を採集を実施。同時進行で、空間・照明演出家関口裕二氏、舞台制作チーム担当リーダー土谷真喜子氏を加え、研究会を重ね、実践研究発表形式を決定していった。

遠隔距離での芸術家との共同研究舞台制作実施のため、企画進行（コンセプト・企画書を双方にて作成→企画書交換→推敲→ドラマツルギー、構成表作成）は主に、インターネットツールを使用し、Skype ミーティング、Google+にての意見交換、情報収集などを実施した。

4. 研究成果

1年目の文献リサーチ、現地での様々な分野のアーティスト、研究者、評論家との交流、研究会、招聘、シンポジウムを通し、文献を通してのみならず、インドネシアの舞台芸術の現状を肌で理解することができた。また、インドネシア拳法、シラットの宗教儀礼的要素や、様々な流派への近代武術への発展などの経緯と舞踊身体語彙の関係性を実践的にリサーチすることができた。そうした情報をふまえて、2年目は、実際にインドネシアアーティストを招聘し、それぞれの作品創作過程の方法論の違い、解釈の違い、振付過程の違いなどに直面しながら実験的舞台創作発表を行った。伝統舞踊、武術、現代的な身体表現技法の共存の可能性を多様な視点から思考することで、次なる課題を得ることができた。

具体的な成果としては、振付論を図書にて発表。実践研究をワヤン・クリのダラン（語り部、人形遣い師）であるスラムット・グンドノ（Slamet Gundono）氏、と振付家のマルチナス・ミロト（Martinus Miroto）氏、映像作家石川慶氏、音楽家森永泰弘氏、との協力体制により、舞台制作発表形式にて研究発表を実施。

映像作家石川慶氏が採集した、スラムット・グンドノ氏の語り、音楽をモチーフとし、参加研究者個々のアイデアから、インドネシアと日本の文化背景を探り作品構成を設定。ジャワ伝統舞踊や、ジャワ音楽の音階などについて分析し、ワヤン・クリの文化背景、ダランについてを調べ、それらの要素を取り込

んだ創作研究を、身体表現、映像表現、音楽表現それぞれについて行った。インドネシア文化といっても大変多様であるために、研究対象内容は主にジャワの文化について焦点をあてたが、その際、歌の詩や語りにおけるジャワ語の隠喩の解析については、十分とはいえ、今後の課題となった。身体技法については、伝統舞踊の技法の強度と現代舞踊の身体技法の自由度の相違が大変大きいことから、互いの動きを伝授し合う、ということではなく、それぞれの身体から生み出される動きの模索に重点を置いた。また、身体同士の最も洗練されたコミュニケーションともいえる武術の動きや組み方の方法論を参考にし、それぞれの身体の違いを尊重しながら共存し合える方法を模索した。

レクチャー、ワークショップ、シンポジウム・研究会の実施については、予定より多くの講師の方々を招き、多領域における講義とディスカッションが可能となった。信州大学人文学部にてプリンチパル・シラット師範であるスシロ氏を招聘した際、シラットの型やスニ（舞踊）、トヤ（棒）、クリス（剣）の使用法の解説を受け、それぞれの戦術についてのデモンストレーションを実施し、それらにまつわる、口頭伝承の説話、伝説、さらに、日常生活で今、現在生きる言い伝えと、それらがどのように身体技法に影響をしているか、についての貴重な話を聞くことができた。また技法自体においても、舞踊の要素を伴う戦術が多いことから、武術と舞踊の歴史をひも解くヒントを得ることができた。

セゾン文化財団森下スタジオにて、振付家マルチナス・ミロト氏を招聘したワークショップ等については、音楽家森永泰弘がジャワの音楽の構造、音階などについて研究を深め、マルチナス・ミロト氏の歌声を録音し、その素材の再生方法を思考錯誤しながら、舞台作品用の音楽を作曲する、等、大変意義ある共同作業を実施することができた。

同会場にて実施した映像作家 石川慶氏、音楽家 森永泰弘氏、マルチナス・ミロト、スラムット・グンドノら共同研究者と共に実施した実践研究発表（2012. 3. 14）は、作品構成としては、途中経過を発表するにとどめたが、上記の音楽、映像、舞踊についての要素を共存させ、それぞれの研究内容の成果と課題を発表する場とした。その研究内容についてシンポジウムを実施し、招聘講師である國學院大學教授 谷川渥氏、京都造形大学教授 榎本了壺氏、多摩美術大学教授 萩原朔美氏らと、研究者、評論家、実践家を交えディスカッションを行うことができた（2012. 3. 15～18）。また上記の研究実施内容の映像資料・文書資料としてドキュメンテーション化してまとめたものから、舞台作品として構成を完成させ、各領域の研究内容を深め

ていく、という次の課題へとつなげることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計1件)

北村明子、「舞踊作品における振付とその生成過程」、文理社、「舞踊学の現在—芸術・民族・教育からのアプローチ」pp99-107

[その他]

ホームページ等

<http://bodyartslabo.com/critique/to-belong.html>

<http://www.akikokitamura.com/tobelong/>

<http://salihara.org/event/2012/03/16/to-belong>

<http://www.tempo.co/galeri/1948/To-Belong-Suguhkan-Perpaduan-Gerak-Jepang---Jawa>

(Indonesia, Tempo 誌)

http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/kitamura_1/ws/

<http://www.akikokitamura.com/html/schedule.html>

<http://www.moma.pref.kanagawa.jp/public/HallNewsDetail.do?no=1294564840003&hl=k>

<http://www.moma.pref.kanagawa.jp/public/HallNewsDetail.do?no=1293523137959&hl=k%20>

<http://www.moma.pref.kanagawa.jp/public/HallNewsDetail.do?no=1293523137959&hl=k%20>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村明子 (KITAMURA AKIKO)
信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：40334875

(2) 研究分担者

() なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

() なし

研究者番号：